

石行寺境内の石碑（岩波観音堂前宝篋印塔<sup>ほうぎょいんとう</sup>の解説）

1. 場所と設置状況

場所は図-1aの「ここ」である。岩波の新福山石行寺境内最上三十三観音7番札所岩波観音堂傍にある宝篋印塔刻字（銘文・碑文）の解説について記述する。宝篋印塔はあちらこちらにあるが、特にこれに興味を持ったのは、私の亡き父母が眠る菩提寺にあって一際目立つからである。

図-1bは東から西を見た状景である。



図-1a



図-1b

## 2. 塔の全体像

全体像は図-2のとおり。宝暦十<sup>庚</sup>辰（1760）年七月十日建立のもので、260年以上経過しているが、欠落部もなく形としてはきれいに残っている。

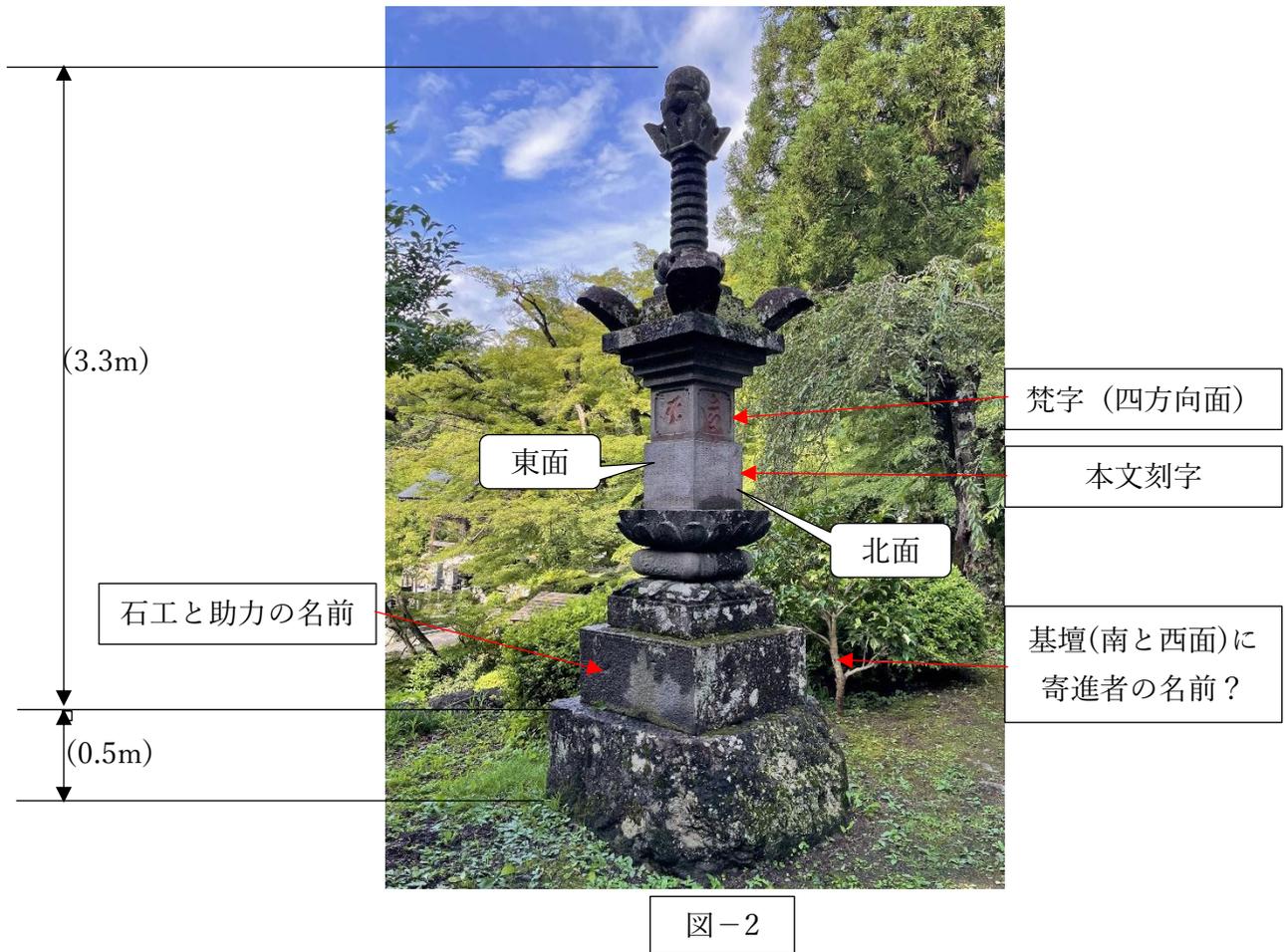


図-2

元位置は図-1に記載したとおりで現イチョウ木の所にあったが、昭和60年前後に境内整備に合わせて現在の場所に移動したものである。

## 3. 刻字の解読

宝篋印塔の四方面基礎部には、次頁以降図-3a~図-3dのような文字が刻まれている。

また、塔身部には「梵字」が刻されており同図の上部に記載した。

「梵字」は彫りが深くきれいに残っているが、本文刻字は石の風化・劣化が著しく、通常日光下においては読むことは困難になっている。冬期間に雪を擦って撮影したものを持っているので記載して置く。

これは宝暦十<sup>庚</sup>辰七月十日（1760年）建立「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」を納めた宝篋印塔であることが判明した。

(北面=元は東面)

[ ウーン (阿闍如来) ]

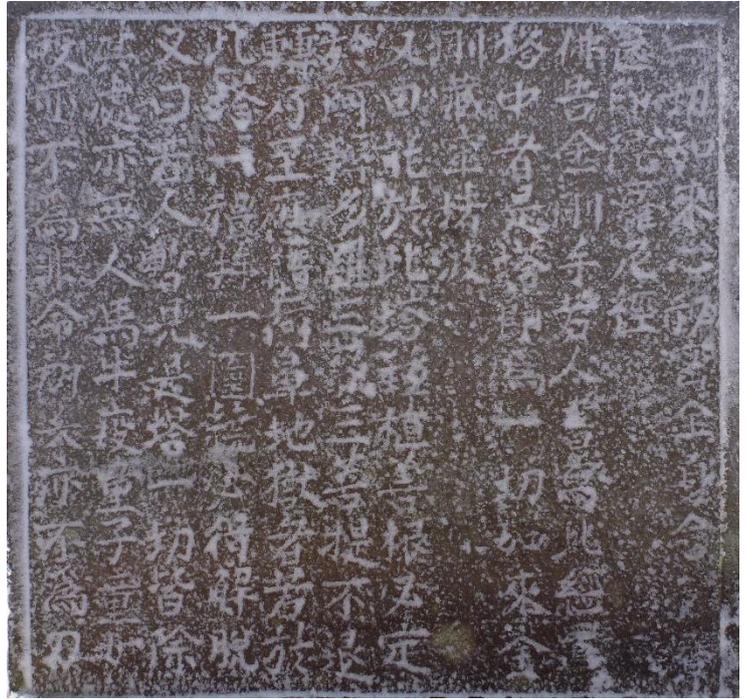


図-3b

(北面 || 元は東面)

一切如来心秘密全身舍利宝

篋印陀羅尼經

佛告金剛手若人書寫此經置

塔中者是塔即為一切如来金

剛藏窠塔波

又曰龍施此塔種植善根必定

於阿耨多羅三藐三菩提不退

轉乃空應墮阿鼻地獄者若於

此塔一禮拜一圍遶必得解脫

又曰若人暫見是塔一切皆除

其處亦無人馬牛疫童子童如

疫亦不為非人命所夭亦不為刃

始まり

宝篋印陀羅尼經の真髓 (一部) を抽出

(東面=元は南面)

[ タラク (宝生如来) ]

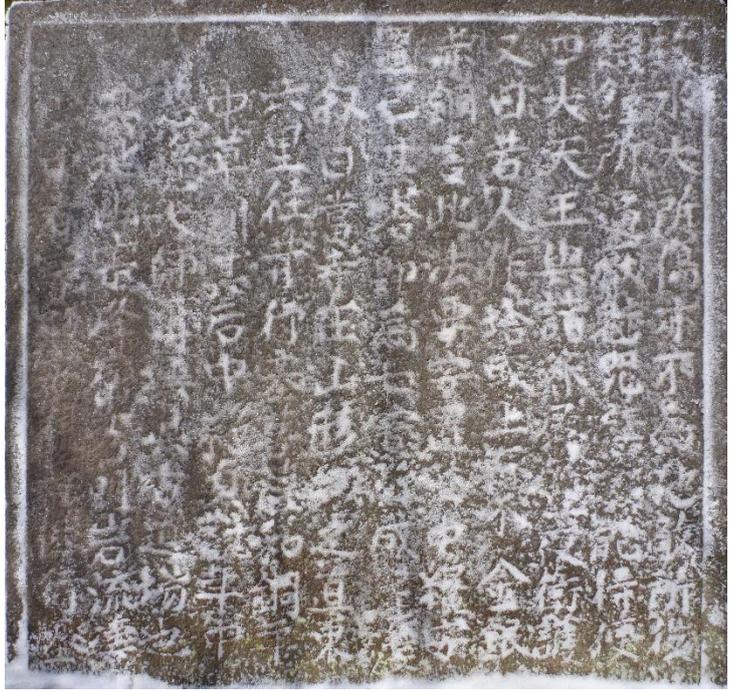


図-3b

(東面 || 元は南面)

杖水火所傷亦不為他敵所侵

飢饉所逼厭魅呪詛不能得便

四大天王興諸眷屬晝夜衛護

又曰若人作塔或土石木金銀

赤銅書此法要安置其中纔安

置己其塔即為七寶所成 □ □

叙曰當寺在山形城之真東

六里往昔行基菩薩和銅年

中草創其後中繼貞觀年中

慈覺大師再興真古道場也

其地幽寂峰巒秀明岩流淒

涼中有寶殿安觀音像行基

当寺 (石行寺) の縁起

宝篋印陀羅尼經の真髓 (一部) を抽出

(南面 = 元は西面)

[ キリーク (阿弥陀如来) ]

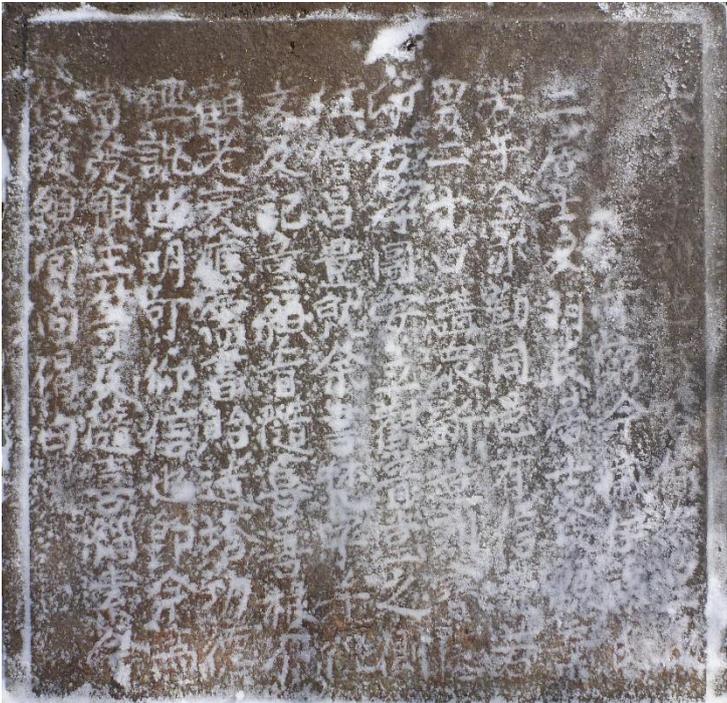


図-3c

(南面 || 元は西面)

太子牛刻也威容□□皇民

□禮□□□□□□□□氏

二居士□羽氏居士発願棄

若午金亦勸同邑有信□若

男米□□講衆新造□宝篋

印石□匡安立観音堂之側

住僧昌豊就余書梵字并經

文及記意願普隨喜善根成 (不?)

願光哀應需書貽造塔功德

經誌典明可仰信也即余為

當発願主等□□喜緇素今

代発願回向偈曰

この宝篋印塔建立の動機、背景、目的を記載なのか？

(西面=元は北面)

[ アク (不空成就如来) ]

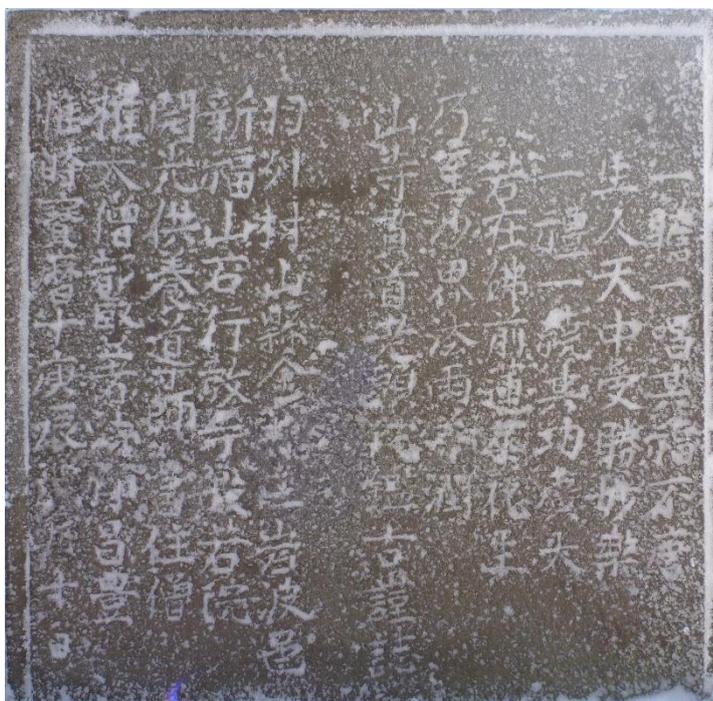


図-3d

(西面 || 元は北面)

一瞻一唱其福不唐

生人天中受勝妙藥

一禮一繞其功廣大

若在佛前蓮華化生

乃至沙界滋雨滋潤

山寺貫首 老頭陀鑑右謹誌

羽州村山懸金井庄岩波邑

新福山石行教寺般若院

開光供養導師当住僧

権大僧都豎者法印昌豊

維時宝曆十<sup>庚</sup>辰七月十日 (千七百六十)

(この部分は何か他の御経の  
部分抽出か?)

当寺の署名

ここまでは山寺貫首陀鑑が草案 (文章選出)  
した文書

#### 4. 意訳

碑文内容は次頁以降のとおりである。

- ・ 1 本経については「大蔵経テキストデータベース委員会のHP」が活字化しているが、返り点が打たれていない。また、その文字に即した読み下し、全文の直接意訳はしていない。
- ・ 2 また、「<https://tutinago.hatenablog.com/entry/>」サイトに現代語訳が載っているが、全体を要約したもの＝粗筋である。逆にこれには本経の漢文を載せてはいるが、読み下し、直接の意訳はしていない。

その他、インターネット上でも探せない。

そこで上記二つを参考にしながらも私の感覚で、漢文に返り点を打ち、意訳していることから本旨とは少しずれているかもしれない。むしろ、誇大妄想的に膨らましているかもしれない。

(今の北面↑元は東面)



○一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經を納めた。  
(その内容の骨子は以下のとおり。)

○佛告<sup>二</sup>金剛手<sup>一</sup>。

仏陀・お釈迦様は、普賢菩薩と同体の金剛手に告げた。

○若人書<sup>レ</sup>寫<sup>二</sup>此經<sup>一</sup>、置<sup>二</sup>塔中<sup>一</sup>者。是塔即為<sup>二</sup>一切如来金剛藏<sup>一</sup>窠塔波。

もしも後世の人が発心してこの經を写し書きし、その塔の中に置いた(納めた)者あれば、この塔はすなわち、一切如来金剛手を内蔵した窠塔波他ならぬになる、つまり、この塔は菩薩(仏)様そのものである。

又曰<sup>二</sup>龍施<sup>一</sup>。

また、龍施菩薩が言った。

○於<sup>三</sup>此塔種<sup>二</sup>植<sup>一</sup>善根。必定<sup>三</sup>於<sup>二</sup>阿耨多羅三藐三菩提(得)<sup>一</sup>不退轉。

この塔に植え込んだ種・芯は善根<sup>二</sup>よい報いを生み出す原因としての善行となる<sup>一</sup>だろう。そうすれば、悟りを開いた菩提の境地を得ることにおいては、必ずや定まって変わることはないだろう。

○乃<sup>レ</sup>至<sup>三</sup>應<sup>二</sup>墮<sup>一</sup>阿鼻地獄<sup>一</sup>者。若於<sup>二</sup>此塔<sup>一</sup>。一禮拜<sup>一</sup>圍遶。必得<sup>二</sup>解脱<sup>一</sup>。

例え阿鼻地獄に墮するに至り及ぶ者であっても、もしも、この塔において一所懸命に真の禮を以ってこの塔を回りながら拝めば、必ずや解脱の心境を得られよう。

又曰。

また、金剛手は曰く。

○若人暫見<sup>二</sup>是塔<sup>一</sup>一切皆除。其處亦無<sup>二</sup>人馬牛疫童子童如疫<sup>一</sup>。亦不<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>非命所<sup>一</sup>夭。

もし人が暫くもこの塔を見ることができれば一切の災難を除き(除かれ)、その処にはまた、人や馬牛(六畜)の疫病や童子童女の疫癘の患が起きない。また、不慮の災難で死ぬ、若死じにする処(こと)はない。

次頁へ

「亦不為刃」の意味合いは次頁(東面)に続く。

(今の東面↑元は南面)



○亦不下為<sub>二</sub>刃杖水火<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>傷。亦不下為<sub>二</sub>他敵<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>侵。

また、刀・杖・水・火の為に（により）傷付く処なく、また、他の敵（盗賊怨讎<sub>えんしゅう</sub>）に侵されること  
なく、

○飢饉所<sub>レ</sub>逼<sub>ひつ</sub>。厭魅呪詛不<sub>レ</sub>能得<sub>レ</sub>便<sub>えんみじゆそ</sub>。

飢饉貧乏が押し迫って処（処）や厭魅呪詛（人形を憎い相手に見立て念を送って呪うこと）も能力が  
なくなり、頼りを得なくなる、そのような呪術も効かなくなる。

○四大天王興<sub>二</sub>諸眷属<sub>一</sub>。晝夜衛護<sub>ひるよる</sub>。

四大天王は諸眷属を興し、諸々種々の仏は厄難不幸に立ち向かい、昼夜護衛する。

又曰、

また、金剛手は曰く。

○若人作<sub>レ</sub>塔<sub>下</sub>或<sub>二</sub>土石木金銀<sub>一</sub>赤銅<sub>上</sub>。

もし人が土・石・木・金・銀や「赤銅||金銀銅」の合金を以って塔を作り、

○書<sub>二</sub>此法要<sub>一</sub>、安置<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>。

この法（陀羅尼）の神呪を書いて、その塔の中に安置して、

○纔安置<sub>二</sub>己<sub>一</sub>、其塔即為<sub>二</sub>七寶<sub>一</sub>所成。

ささやかにでも毎日己の傍らにおく気持ちになれば、その塔はたちまちに七宝の満ちた所と成るだ  
ろう。

じよはく

叙曰（寺の縁起を記す）当寺は山形城の真東6里の場所にある。 當寺在山形城之真東六里

往昔行基菩薩和銅年中草創その昔、行基菩薩が和銅年間に草創した。

其後、慈覚大師が中を継ぎ貞観年間に再興した。 ここは往古より真の修験道場である。 貞古道場也

其地幽寂峰巒秀明 岩 流 湊 瀌  
その地は静寂で峰々が連なり眺めもよく、龍山川には奇岩が転がり、清らかで冷たい水が流れている

境内には観音様と行基菩薩の像を安置している宝殿（仏殿がある）  
中有寶殿 安観音像 行基

石行寺の存立環境を説明

(南面↑元は西面)



太子牛刻也威容□□皇民  
□禮□□□□□□□□氏  
二居士□羽氏居士発願棄  
若午金亦勸同邑有信□若  
男米□□講衆新造□宝篋  
印右□國<sup>①</sup>安立観音堂之側  
②住僧昌豊就余書梵字并經  
文及記意願普隨喜善根不  
願光哀應需書貽造塔功德  
經誌典明可仰信也即余為  
當発願主等□□喜緇素今  
代<sup>③</sup>発願回向偈曰

①安立観音堂之側

観音堂の側に安立した。

②住僧昌豊

(成就・完成)した

就

余書梵字并經文<sup>と</sup>

この昌豊住職が梵字と經文などを取り纏めて、書いたものである。

③発願回向偈<sup>えこうげ</sup>曰

この仏教の根本思想の功德がみんなに行き渡るようにという願いを発し込めた。

南西面が広がっていることから、太陽が頭にある13時〜15時の間で、刻字面に水をかけると少しでも判読しやすくなる。

(西面↑元は北面)



一せ瞻ん、一あらず唱空に、其あらず福空に不レ唐に  
 (あおぎみる) 一つ一つのありがたい言葉について、心を込めて唱えれば、それが本当の幸福となる。

生二人天中一、受三勝妙薬一  
 人は天中に生まれて、勝妙(非常にすぐれた智慧を授かって生まれた)の薬を受け、

一によう禮る一を繞る、其功廣大  
 (巡る) 一礼をしながらこの塔を回れば(仏様に心を巡らせば)、その功德は広大に及ぶ。

若在三佛前、蓮華化生  
 (法華経第一百四十段の最後の一説) このようにして仏さまに額ぬかずけば、仏様にすがれば、蓮華が咲くように立派な人間に生まれ変わっていくだろう。

乃ないししやか至い沙界い滋雨い滋潤  
 そのようになれば、宇宙に散らばっている多くの世界は、万物の生長に都合のよい雨が降って、それが十分に潤うるおいい、みんなにとって幸せな世の中になるだろう。  
 (行き渡り)

山寺貫首老頭陀鑑右謹誌  
 山寺の貫首、老頭ろうとうの陀鑑が、右に謹んで、文言の綴り(文章・内容)を創作・編集したものである。  
 (へりくだって)

羽州村山郡金井庄岩波村  
 羽州村山懸金井庄岩波邑  
 新福山石行教寺般若院

開光供養導師当住僧(開眼) || || 開光供養の祭典の導師は  
 (開眼) 当寺の住僧「権大僧都堅者法印昌豊」が務めた。  
 権大僧都堅者法印昌豊

いわば、奥書

維時宝曆十庚辰七月十日 (一七六〇年)

## 5. 要約と考察

石行寺（以下「本寺」という）の現佐藤亮照住職からの聞き取りを含めて、要点を整理したものである。

その1；ストーリー構図は次のとおりと考える。本寺第四十四世の「昌豊」<sup>しょうほう</sup>住職は、この事業の立案・総合企画を担った発願主（総合プロデューサー、全体統括者）であった。その中で、4,300文字以上もある「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」の中から限られた本塔4面に収まるような真髓（神髓）部分の抽出を山寺貫首陀鑑に依頼した。

昌豊は、選出されたそれらの文章に自分のオリジナルな（固有の）文面を付け加えて、全文を完成した。それを4面に割り当てて（配分し）和紙に墨書し石工に手渡した。また、昌豊は、石工（助力含む）の選定と依頼、施主・寄進者の募集などを行った。

その2；開光供養祭典の導師は当寺の住僧「権大僧都堅者法印昌豊」<sup>ごんのだいそうざりっしゃ しょうほう</sup>が務めたとあり、その目的は（開眼）何だったのか。なお、開光とは、対象物に仏の魂を入れることで、仏眼を開くという意味の「開眼」と同意義である。

- ① 狭義においては（直接的には）、本塔建立を記念しての（完成を踏まえての）、つまり塔そのものの開眼供養ということであろうか。
- ② 広義においては、宝暦元（1751）年に石行寺が火災に遭って本堂が消失している。再建には浄財・寄付を集めて建設するためには完成まで十年近くかかったものと想像される。このような点からして宝暦十年は、本堂再建完成の年であったのではないか、この本堂再建完成に合わせて本塔を建立し、その開眼供養ではなかったのか。

その3；本塔は木村博・加藤和徳・市村幸夫の共著単行本「信州石工 出羽路旅稼ぎ記（青娥書房発売）」の61頁と127頁で紹介されている。61頁「18 池上文六」（石工）の説明において、「造立目的は開光導師（山寺）の供養であった。」と山寺住職の個人のための供養としているが、これは誤った解釈であると思う。歴史的経緯および漢文（文字綴り）の読み方からしてそれは誤解と写るが。

その4；第四十四世の「昌豊」<sup>しょうほう</sup>は、本堂再建と鐘楼（2階建て、観音堂西側の桜の木の北側の墓のところにあった）を建設したとされている。それに係る「撞鐘供養塔」<sup>つきがね</sup>という石碑があり、前記、同図右側宝篋印塔と並んで安置している。4方4面に寄進者と思われる刻字（150名ほど）がびっしりと書かれている。これには建立年や由緒は刻字されていない。

その5；本宝篋印塔の石工については、現状東面（宝生如来面）の基壇に「信州高遠石工 池上文六」と刻字されており、さらに、図(表)－4のとおり刻字がある。

「信州高遠石工 池上文六」	
前出単行本	私が確認
助力 □□村 次右衛門 □□村 久右衛門  岩波村 喜□	助力 八森村 □□□□ 中桜田村 □□□□ 小立村 次右衛門 平清水村 久右衛門 岩浪村 喜□
図(表)－4	

その 5 ；

基壇の現状南面（阿弥陀如来面）と現状西面（不空成就如来面）には、寄進者と思われる名前が書かれて、最後に「二十口」という刻字を確認出来る。

## 6. 梵字配置のこと

本件のものは、前記図－3a～図－3b に記載したとおりである。

梵字の配置は、図(表)－5 中「本件現状」のとおりで、「《 歴史&宗教 No024 》五輪・光明真言と宝篋印塔のこと」に記載した基本配置（向き）とは異なっているが、なぜなのか？

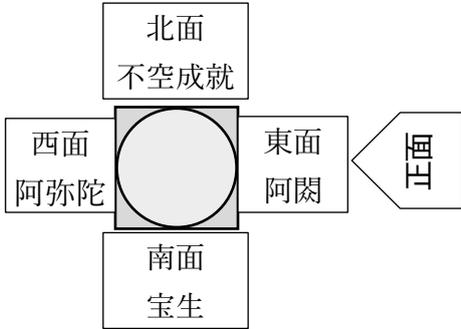
基本配置	（4面は地理上の方位と一致）			
	東面	南面	西面	北面
あしゆく 阿闍如来 （文章の初め）1	ほうしょう 宝生如来 →2	阿弥陀如来 →3	ふくうじょうじゅ 不空成就如来 →4(終わり)	
本件現状	宝生如来 →2	阿弥陀如来 →3	不空成就如来 →4(終わり)	阿闍如来 （文章の初め）1
図(表)－5				

金剛界曼荼羅を踏まえた宝篋印塔における梵字の基本配置は、阿闍如来を配する東面を正面とし、ここから本文を書き始める。東→南→西→北の順に阿闍如来→宝生如来→阿弥陀如来→不空成就如来を配することになっている。

ところが、現況、本件塔の阿闍如来を配した文章の初めは北面となっている、正面は北方向を向いている。その中でも、文字面を追っていくと右回りに、つまり、（北）阿闍如来→（東）宝生如来→（南）阿弥陀如来→（西）不空成就如来の配置となっている。さて、移動前の元の位置にあった時は、前記図－1b 写真のとおり所において、それより東方にある岩波観音堂を背にして正面を拝んでいたということである、ということは、正面となる阿闍如来（文章の初め）の面は東方向を向いていた、つまり、基本配置のとおり東面にあったことになる。

このことから移動時に図－6 のとおり、**90度左旋**させてしまったということであろう。

当初配置  
(基本向き)



移転の時 90度  
左旋した。

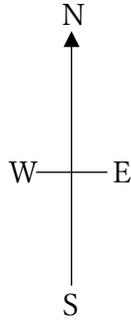
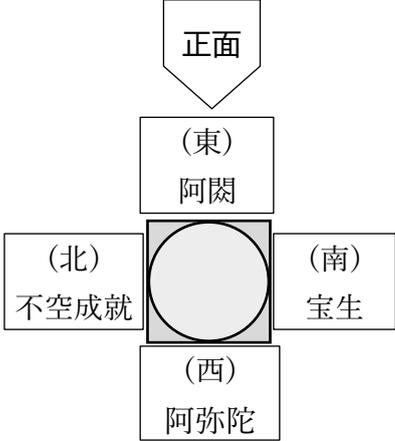


図-6

現状の向き



\*\*\*\*\*

刻字（碑文）の解読や説明書きについては、浅学非才の私が記述したものであり、可笑しいと気付かれた方は、ご自分の才覚を以ってご自由に解釈してください。

(end)